

メッセージアウトライン

ヨハネ13：31~38「新しい戒め」

ユダはイエスを売り渡そうとして、最後の晩餐の席から出ていった。ユダは敵のユダヤ人たちのところへ行ったのである。イエスは、「今こそ人の子は栄光を受けました。また、神は人の子によって栄光をお受けになりました」(31)と過去形で語られたが、これは未来に確実に起こる事実をすでに起こったものとして表現する方法である。罪をあいまいにせず、決して赦すことのない神の義と、その罪人を愛し罪の身代わりとなって死なれようとする神の愛が十字架においてははっきりと現され、イエスと父なる神にその栄光が帰せられるのである。

「子どもたちよ」(33)とは、これは、「小さな子どもよ」「かわいい子どもよ」という愛情のこもった表現で、ヨハネの福音書ではここだけで使われている。ここには愛する子どもたちを残して、彼らがついて行くことのできない所に旅立つ父親としての気持ちが込められている。この節でイエスが弟子たちに言われていることは、36節でペテロに言われているように「今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます」というほんのしばらくの間のしんぼうのことを言うのである。イエスは天に昇り、弟子たちは地上に残される。そしてやがて地上の生涯が終わるならば、またイエスと共に永遠にいたることができるのである。「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのようにあなたがたも互いに愛し合いなさい」(34) ここでは自分を愛するようという自己愛ではなく、イエスが示された愛のように愛せよと言われている。その愛とは、取税人、罪人たちの友となり、らい病をはじめあらゆる病人をいやされ、ユダヤ人から嫌われていたサマリア人の所へも行って福音を語られ、また、悪霊につかれていた人をいやし、あらゆる町々、村々を回って福音を伝えられ、そして最後には十字架にまでかかられた愛である。→ローマ5:6~8,ヨハネ10:11,15:13参照

このような愛を私たちはどうやったら持つことができるのか。それは私たちの内にはない。それはただすべてのものをご自分のみこころのままに変えることのできる神にあってのみ可能なことである。神だけが私たちをこのような愛を示しうる人間に造り変えてくださることができるのである。そのために私たちは熱心に祈り求めていく必要がある。

「もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです」(35) 私たちはただ神によって造り変えられ、愛において成長し、お互いに愛し合い、仕え合い、助け合う者となることによって、この世にキリストのからだである教会の存在を示し、神の栄光を現すことができるのである。

ペテロはイエスのことばが理解できず、「あなたのためにはいのちも捨てます」と言った。(36,37)彼は自分の内にある肉の弱さをまだ知らなかった。イエスはそのペテロに対して、「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います」(38)と言われた。そして事実、そのようになっていくのである。

イエスが与えてくださった新しい戒めは、「互いに愛し合う」ことであった。私たちも生まれながらの肉の力に頼るのではなく、互いに愛し合う者となることを祈り求めたい。そこからすべてが始まる。